



賢治のまちから
高校生★童話大賞

『夏色の奇跡』

東京都立戸山高等学校 二年 岡部 綾子

もしも、この世界に奇跡があるならー

夢を、見ていた。夢の中で、夢だと分かっている夢だった。夏の太陽がキラキラと照りつける、乾いて色あせた地面。緑の木々は風にざわざわと揺れ、蝉時雨が暑さを際立たせ、絶え間なく響き渡る。ここは、どこか思い出せないけれど、懐かしい。見覚えがある。ここは…

久しぶりに降り立ったその駅は、田舎の匂いがした。晴れ渡った、抜けるような青空に、綿菓子みたいな雲が、ひとつ、ふたつ浮かんでいる。時おり吹いてくる蒸し暑くてやわらかい風は、むせかえるような濃い緑の霧を含んでいるようだ。

私は明け方、夢を見ていた。十三年前、ひと夏を過ごした、祖田の住んでいた町の夢だ。夢の中で、どこだか分からなくてさま



賢治のまちから
高校生★童話大賞

よっていた私は、古い神社を見て、その町だと気づいたのだ。確かににはつきりと確信したのだが、どうして神社でその町の記憶が蘇ってくるのか、私には分からない。何か神社に思い出でもあったのだろうか。でも、確かにその町なのだ。それにしても、どうして今頃そんな昔の夢を見るのだろうか。

小さい時から活発で、おてんば娘だった私は、ひとりその町を訪ねてみることにした。大学も夏期休暇に入って、暇をもてあましていたのだ。思い立つとすぐ家を出た。

小学校一年生の時、私はこの町で夏休みを過ごした。母がちよつとした病気で入院し、その間だけ、私は父と一緒に祖母の家で暮らすことになったのだ。祖母は、祖父を早くに亡くし、たったひとりで暮らしていた。都会で生まれ育ち、田舎の暮らしを知らない私には、その日々は毎日が冒険だった。この町の自然が、町並みが、人々が、空気が、目に見えるもの、体で感じるものすべてが新鮮だったことは今でも覚えている。それだけに、日々が過ぎるのは早く、母が退院してすぐ、私はまた元の家に戻った。

祖母もその年、亡くなってしまった。この町には、他に親せきや知り合いがいたわけではないから、それ以来十三年間、この町を



賢治のまちから 高校生★童話大賞

訪れることは一度もなかった。年月が経ち、様々なことを学び、成長していった私は、この町での日々を少しずつ忘れていった。鮮やかな日々も、今では、目を凝らして見つめてもだんだん輔郭がぼやけていくような、幼い日の思い出になってしまった。

駅前のバス停のベンチに座る。祖母の家があつた場所は、駅からさらに三十分ほどバスに乗っていったところにある。暑い暑い夏。今日も元気な太陽がさんさんと地球に降り注いでいる。夕オルで汗をぬぐって、帽子をかぶり直し、あたりの風景を見まわす。古びて文字が消えそうになっている喫茶店の看板。真っ黒に日焼けした子供たちがブルの道具を肩にかけて走って行く。のら猫がだるそうに、日陰で寝そべっている。目につくものはそれくらいで、他には何もない。この町は、十三年前と変わらないのだろうか。

私は今日、二十歳になった。いわゆる大人ってやつだ。小さい時から思っていた。どうして二十歳が大人なんだろうって。だって、昨日までの私は十九歳で、今日の私は二十歳。だけど、何も変わったことなんてない。現に、私は今朝、小学校の頃の夢を見



た。私は、ずっと子供のままでいたいと思っっているのかな。思いを巡らせながら、苦笑する。思い返せば、あの頃は、学校から帰る

と、毎日友達と日が暮れるまで走りまわって遊んでいた。「宿題はやったの？」ってお田さんに怒られながら。それが今では、大学に行って難しい講義

を受け、アルバイトをして、ひとりで暮らしている。それが大人の証だろうか。でも、私は気づかなかった。自分が「大人」になっていくことを。毎日はずながっているから、明日もき乙と同じ日が来ると信じて疑わず、ずっと過ごしてきた。変化はあまりに透明だと思う。透明だから、見えない。見えないから、時間が過ぎ去っていくこと、自分が、世界が変わっていくことを感じない。

でも、その変化を突然悟る瞬間がある。そしていつもがく然とする。なぜ過ぎていく時間の愛しさに気づかなかったのだろうと。私はいつままごとをしなくなったのだろう。私はいつ人形を押し入れの奥にしまったのだろう。思い出そうとしても、どうしても、記憶に手が届かない。



賢治のまちから
高校生★童話大賞

ふと、白いワンピースを着て、麦わら帽子をかぶった女の子が隣に座った。七歳くらいだろうか。きれいにみつ編みにしてもらっている。深みのある黒くて大きな瞳が愛らしい。あれ、この子はどこから来たんだろう。隣に座るまで、人の来る気配など感じなかったのに……。それほどこの田舎の町は静かで人通りも少ない。

「お姉ちゃん、どこへ行くの？」

急に女の子が話しかけてきた。無邪気な表情が可愛くて、優しい気持ちになる。

自然に微笑みがこぼれてきた。

「私のおばあちゃんが住んでいたところよ。このバスの終点から二つ目の駅で降りるの。あなたは？」

「じゃあ、あたしと同じね。おばあちゃんに会いに行くの？」

「ううん、おばあちゃんは、私があなたくらいの頃に亡くなってしまったの。それからこの町には来ていないから、とても久しぶりなのよ。迷子にならないか心配だわ。」

「お姉ちゃん、迷子になっちゃうの？じゃあ、あたしと一緒に行く。案内してあげる。」



賢治のまちから
高校生★童話大賞

それからバスに揺られている間、私はその女の子に、町がどんな風に変ったかを聞こうとして気がついた。この子は十三年前にはまだ生まれていなかったこと。私はその質問をのみこんで、かわりにバスを降りるまで、女の子としりとりをした。

バスを降りると、女の子に待っていてもらって、缶ジュースを二本買ってきた。ところが、いないのだ。女の子は、待っているはずの場所にも、その近くにも見当たらない。何か急に用事でもできて、何も言わずに行ってしまったのならいいが、事故に遭ったり、私のところへ来ようと動いて、どこかへ行ってしまったとしたら大変だ。とにかく探さなくちゃ。

そうは言っても、どこを探したらいいのか見当もつかない。祖母の家に、

あの夏休みを含めて数えるほどしか行ったことがないし、そうえ十三年ぶりなのだ。記憶の片隅に、かすかに残っている風景や建物が無いわけではないが、どこをどう歩いたらいいのかも分からない。私は本当にまぬけだ。そんなこと分かりきっていたのに、何も調べずに家を飛び出して。これでは、本当に迷子になってし



賢治のまちから
高校生★童話大賞

まいそうだ。

方向も分からず、ただ歩くしかない私に、太陽は容赦なく照りつける。肌がじりじり焼けていくのが分かる。民家や小さな商店が建ち並んでいるだけで、何もない、田舎の町。暑さに耐えきれなくて、買ったジュースを一本あけて

一気に飲む。そして、また歩き出す。

「白いワンピースを着た女の子を見かけませんでしたか？」

「さあ、見てないねえ。」

「すみません、みつ編みの、七歳くらいの女の子に会いませんでしたか？はぐれちやつて、探してるんです。」

「あら、まあ。でもそんなに時間がたってないのなら、まだ近くにいるでしょう。私は見かけていないけれど…。」

通りすがりのおじさんやおばあさんに声をかけても、女の子を見たという人はいっこうに現れない。

どうしよう。困ったな。こんなはずじゃなかったのに。今日は誕生日だっていうのに、とんだことになってしまった。公園のブランコに腰かけて、これからどうしようかと途方に暮れる。私はいつもこうだ。後のことを考えずにすぐ直感で行動してしまう。バ



賢治のまちから
高校生★童話大賞

スの駅までは分かったけれど、肝心の祖母の家があった場所への道は知らない。夢に見ただけで、こんな遠くの町に思いつきで来てしまうなんて、人が聞いたら何て言うだろう。私は結局、子供の頃と何も変わっていない。好奇心も、あの頃のままね。

見上げれば、空に、カラスが数羽横切っていった。蝉の声はすぐくうるさいはずなのに、意識しないとうるさく感じないのはどうしてだろう。蝉の声は夏に溶けこんでいる。蝉時雨がやんだ時の一瞬の静寂は、そこだけ夏から切り離されているように感じる。

さあ、そろそろ行こう。立ち上がってまた歩き出す。ちよつと息をついて振り向く。昼下がりの誰もいない公園。さびた鉄棒がほこりっぽい砂に影を落としていた。

いつもと同じように起きて、ゆっくり支度をして、日帰り旅行でもするような気分で、のんびりと電車を乗り継いできたから、もう一二時をまわっている。

女の子とはぐれてから、一時間半が過ぎてしまった。家に帰ったのなら心配ないが、行方が分からないのでは気が気でない。交番に届けた方がいいだろうか。でも、私は女の子の名前も聞いていない。とにかくもう少し探してみよう。



賢治のまちから 高校生★童話大賞

川に出た。水遊びをしている子供たちが向こうに見える。ふと、思い出した。私はこの川でお父さんと魚をつかまえたことがある。毎日のように水に入っていて、ある日サンダルを流されてしまったこともある。朝は祖母の手伝いと夏休みの宿題をやって、午後から川に入る。夕食になると、祖母が川まで呼びに来た。とするど、祖母の家があった場所は、きつとすぐ近くだ。

水をきらめかす光が眩しくて、まぶたの裏に紫色の残像が残る。川に沿って歩いていると、強い視線を感じて足を止めた。白い猫が木の陰から私を見ていた。どこかで飼われている猫だろう。首に鈴をつけている。立ち去ろうとしても、猫はじっと私を見つめる。何かを訴えかけるように。私はしゃがんで猫の頭をなでてやった。人なつっこい鳴き声で私にまわりついてくる。ずっとそうしているわけにもいかないから、にゃん、と鳴き声を真似して私は立ち上がった。

歩いていると、さっきの猫が私を追い抜いた。私の少し前を歩き、時々振り返って私を見る。ついておいでって言ってるみたい。私よりこの猫の方がこの町には詳しい。今日は何もかも成り行きまかせの日だし、私は猫に導かれるままについて行った。



賢治のまちから
高校生★童話大賞

そして、私は見つけたのだ。夢に見た古い神社を。その瞬間、あの夏の記憶が駆け巡った。この神社はなだらかな丘のふもとにあつて、神社の裏道を登っていくと、その丘の上に、祖母の家はあつた。とても見晴らしのいい祖母の家が、私は大好きだった。あの猫は、私を祖母の家まで案内してくれるのだろうか。神社の奥に入っていくと、猫は走り出した。私は木の間から見え隠れする

猫の白と、鈴の音を追いかけていく。汗が流れるのも構わずに、ただ走った。子供の頃感覚が蘇ってくる。

その丘を登り切ったところに、祖母の家は、なかった。何もなかった。真ん中に、一本の木が立っているだけだ。でも、私はあの夏に帰ってきたことを感じていた。

小さなその木に、あの女の子が寄りかかっていた。体中から安心感があふれ出して力が抜けたが、急いで駆け寄る。

「良かった。ずっと探していたのよ。どうしてここに？」
女の子は何も答えずに、私を見つめ、ただだまって微笑んで、銀色の薄汚れた缶を私に差し出した。私は何かに操られるようにそ



の缶を開ける。中には、拙い文字で書かれたきれいな便せんが一枚。

「あたしはおとなになったらまたここへきます。あたしは、みらいのあたしとやくそくします。だから、まっけてね。」

私の体を、電流のような衝撃が走り抜けた。それは、私が祖母の家をあとにする時、当時七歳だった私が、祖母に、そしてこの町にあてて書いた手紙のタイムカプセルだったのだ。私が今日ここへ来ることは、十三年前から約束されていたんだ。

顔を上げると、もうそこには女の子の姿はなく、かわりに、今私が来た道に戻っていく真っ白な猫の後ろ姿が見えた。かすかな鈴の音を響かせながら。小さな木の枝に残された女の子の麦わら帽子がふわりと揺れた。

もしかしたら、世界はこんな素敵なお跡にあふれているのかもしれない。

十三年後のあたしに、あの頃と同じ風が、優しく吹き抜けていっ



た。